

8) ヤマブキシソウ=山吹草

一見するとヤマブキと見まごうほどの黄色い花をつけるのが、このヤマブキシソウである。ケシ科の多年草で本州、四国、九州の林の中に自生する。バラ科のヤマブキは5弁の花に対して、この花は珍しく4弁であることから一目で区別できる。同じ仲間には他にクサノオウ(07-03-14)や高山植物のコマクサ(01-02-24)があり、このファミリーは変化に富んだ科ということもできよう。花は4月中~下旬ごろ径3~4cmほどの鮮黄色の花を上向きに咲かせる。山吹草の萼片は先の尖った緑色で2枚あり、花が咲く前に落ちてしまうため花の黄色を引き立てて、特に樹陰で咲いていると、なおのこと鮮やかに見える。この季節の山野草の中で、最も目立つものの一つということもできよう。しかし咲き始めてから散るのも早く、暖かい光の中であつというまに散ってしまう。学名は『*Chelidonicum japonicum*』で、属名はツバメを意味している。

ヤマブキシソウの種子には『エライオソーム』(Elaiosome)という物質がついている。この物質にはショ糖などの糖分のほか、オレイン酸などの脂肪酸やグルタミン酸などのアミノ酸が含まれており、この部分をアリが好んで食べる。このため種子はアリによってアリの巣まで運ばれ、エライオソームだけがアリの食料となり、種子の部分は巣外に運び出されて捨てられる。このためあちこちで繁殖することが可能になり、これも神様が与えてくれた自然の知恵の一つである。このような方法で種子が散布される植物を専門的には『アリ散布植物』と呼び、自然界には意外と多い。日本でよく知られているものにはカタクリ属(01-02-11 カタクリの項参照)があり、この他にもフクジュソウ属、イチリンソウ属、ミスミソウ属、エンレイソウ属、キケマン属、クサノオウ属、スマレ属などに約200種類ぐらいの植物があるものと考えられている。

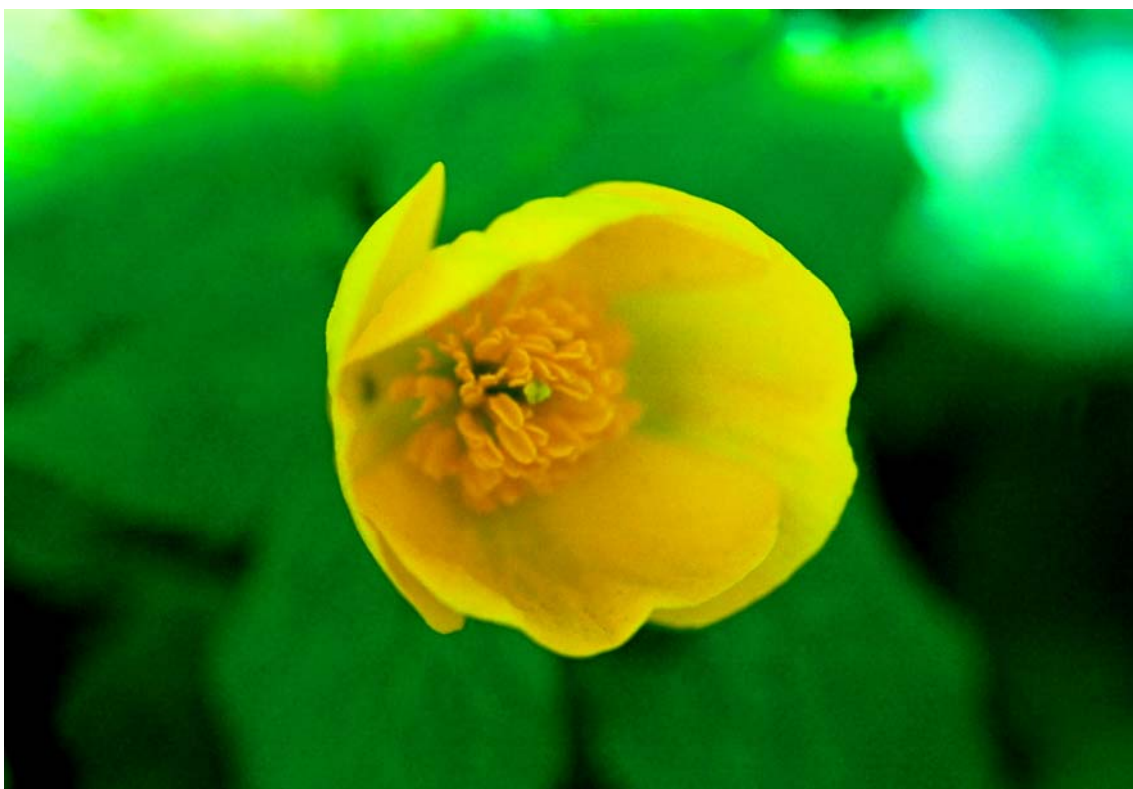
ギリシャでは母ツバメが子ツバメの目を、この植物のサフラン色の汁で洗って、視力を強めるという言い伝えがある。しかし花茎や葉を傷つけると、サフラン色ではない黄色い液を分泌、麻酔性のある有毒成分を含んでいる。嘔吐、呼吸困難、手足の痺れなどを起こすという。毒草はしばしば薬草であることが多く、そのことと関係があるのかも知れない。この植物は何ととってもケシ科の植物である。

ヤマブキシソウを殖やすには株分けがよい。10月から11月頃に根を掘りあげて、根の部分と翌年の芽とが均等に配分されるように、鋭利な刃物やカッターナイフで切っていく。もちろんアリさんになったつもりで秋に種子を蒔いてもよいのだが、これだと花が咲くまでにかかれこれ3年もかかってしまう。しかし種子で殖やすときは、たくさんの苗を同時に作ることができるので有利な面もある。

さて植える場所は1日に2~3時間も陽が当たれば十分で、赤玉土もしくは鹿沼土に腐葉土をたっぷり加えて植えつける。入手するにはイカリソウやセツブンソウなどと同様で、ゴールデン・ウイークの頃に山麓の土産物屋さんや農協の売店などで売られていることが多い。園芸品には朝鮮半島を原産地とする四季咲き性のものもある。



春の野草の代表格であるヤマブキノウ(長野県軽井沢町)。



開花し始めたヤマブキシソウの花。アリ散布植物の代表格で種子には糖分が含まれており、アリが好んで巣まで運ぶ。種子はそこで発芽して増える仕組みになっている。(埼玉県嵐山町)



ヤマブキシソウの花(埼玉県秩父市)



ヤマブキシソウの花。これとよく似た花にクサノオウ(07-03-14)があり、ともに有毒植物で、草の汁を皮膚につけたりするとかぶれる(埼玉県秩父市)。



花は短命で数日ではらはらと散ってしまう(埼玉県秩父市)。

[目次に戻る](#)